

1919年から1920年にかけての冬学期に行われた講義で、ハイデガーは、私たちの日常のかつ具体的な生経験について語っている。「講義を終えて、私は大学の建物から外に出る。向こうで知り合いがあいさつしているのが見える。あいさつに答えよう。劇場を通りすぎるときには、音楽が聞こえてくる。頭に浮かんでくるのは、今夜は劇を見に行こう、今からこれこれのことを片付けよう、遅刻してはならない、といったことである」(GA58, 103)。1919年から1923年にかけてのいわゆる初期フライブルク時代のハイデガーは、このような私たちの日常のかつ実践的な在り方を、認識論的な問題設定によって損ねることなく、ありのままに捉えることを目指していた。そして、このような関心に応じて彼は、私たち自身がそれであるところの人間存在を、近代以降の認識論哲学における、主観、意識、精神といった用語で表すことを回避し、「生 (Leben)」という語によって表現している。

それに対して、1927年に公刊された主著『存在と時間』においては、周知の通り、私たち自身がそれであるところの存在者は、「現存在 (Dasein)」という術語で言い表される。そして、同著の第10節においてハイデガーは、人間存在を表示するために、主観、意識、精神といった表現のみならず、生という表現を使用することをも回避すると述べている (SZ, 46)。さらに、同節では、「生の存在論は、[現存在の]欠性的な解釈という道のりで生じる」(SZ, 50)とも言われており、これらの記述を見る限り、『存在と時間』においてハイデガーは、自身が初期フライブルク時代に用いていた生概念に対して批判的になり、その結果として生概念に代えて現存在概念を用いるようになったように思われる。

では、このように生概念が現存在概念へとその座を譲ったことは、いったい何を表しているのだろうか。ハイデガーは、初期フライブルク期から『存在と時間』刊行の時期までに、生き生きとした私たちの日常のかつ実践的な在り方に即した思想を展開することを取り止め、単に形式的に人間存在の在りかたを規定するという方向に舵を切ったのだろうか。

本発表では、用語法上は消滅するハイデガーの生概念が、現存在概念が用いられるようになる『存在と時間』にまで実質的には継承されていることを示し、初期ハイデガーによる人間理解が『存在と時間』においても継続されていることを明らかにする。そのために本発表では、まず、ハイデガーが生概念の使用を中止した理由を、生概念の二重性という観点から解明し、つぎに、初期フライブルク期における生の根本規定としての「慮ること (Sorgen)」の概念が、『存在と時間』における現存在の根本規定としての「慮り (Sorge)」の概念へと、その内実において継承されていることを確かめていく。